

目次

とよなか魅力対談

爆笑の上方落語にこの人あり

2

特集とよなかで伝統芸能三昧

日本最古の芸能 能に親しむ

5

もっと身近に伝統芸能

7

命の響きがする楽器

寄席三味線、期待の新星

芸で「心」を伝えたい

ねじり鉢巻、粋でいなせな「かつぼれ」

世界最古のオーケストラ「雅楽」を楽しむ

片岡リサ先生に聞く「邦楽ミニ講座」

伝統芸能にふれる子どもたち

13

片岡リサ Kids 邦楽塾

能楽・仕舞ごども教室

とよなかグラフィティ

15

豊中市には、全国的にも珍しい「伝統芸能館」があり、市民が気軽に古典芸能や大衆芸能に親しむことができます。また、市内に在住する能楽師や落語家による演能会や落語会が定期的に開催されるなど豊中は伝統芸能が根づいたまちでもあります。今号では、身近なところで伝統芸能に親しめる豊中の姿をご紹介します。



笑福亭仁鶴さん

落語家

小佐田定雄さん

落語作家

巻頭対談

とよなか魅力対談

市内在住で上方落語界の重鎮である笑福亭仁鶴さんに、半世紀を超える落語家生活を振り返ってもらうとともに、豊中での暮らしについて落語作家の小佐田定雄さんを聞き手として語っていただきました。

豊中の環境が気に入って

小佐田 仁鶴師匠は昭和36年（1961年）に入門されてもうすぐ56年になられますが、豊中にはいつからお住まいに。

仁鶴 昭和46年にこちらにきました。

小佐田 ということは人生の半分以上、豊中で暮らしておられるということですね。

仁鶴 そうですね。いながいこと暮らすとは思わなかったんですが、まあ便利よろしいですね。千里中央では何でも買えることができますし、新御堂筋を使えば大阪へ行くのもあっという間。空港も近いし新幹線に乗るのもすぐですから、非常に便利のええところだと思います。

爆笑の上方落語にこの人あり

家のすぐ裏が島熊山なんですけど、島熊山というのは万葉集にも詠まれた古い山やそこですね。私が来たころはキジもいる、タヌキやキツネもいて、蛭も飛んでいるようなところで非常に環境が良くて気に入ったんですね。豊中に来てから仕事も大変順調でした。方角も良かったんですよ。今も自然が残っていて暮らしやすいんですよ。

上方落語との出会い

小佐田 師匠が落語家になるのって思いはったのはどんなきっかけですか。

仁鶴 昭和28年ごろ初代桂春團治のし

コードを古道具屋の店先で聴いたことです。当時漫才や講談、浪曲なんかと一緒に店先にSPRレコードが積み上げられていたんですね。早速買って帰って夢中になって聴きました。それまでは落語というたら、NHKラジオから流れてくる東京の師匠ばかりでしたからね。大阪に落語家がいるとは知らなかったんですね。ところが、友達と一緒にレコードを聴いたんですけど、笑ってんの私だけ。なんでか言ったら、レコードの時間内に収めるために、えらい早口の大阪弁やったわけです。そやから笑いの好きやない者には聴き取れへんのですわ。

笑福亭仁鶴さん

Profile

1937年生まれ。豊中市在住。1961年六代目笑福亭松鶴に弟子入り、三代目笑福亭仁鶴を名乗る。1965年深夜ラジオのDJで若者の絶大な人気を得る。1970年には週10本以上のレギュラー番組を抱え全国で人気が沸騰。「視聴率を5%上げる男」との異名を持つ。タレント活動と同時に古典落語を大切にし独演会を全国で開催。上方落語を若者に浸透させた功労者となる。NHKの長寿番組『バラエティー生活笑百科』の司会でもお馴染み。2005年からは吉本興業の特別顧問に就任。1970年大阪府民劇場 奨励賞、1972年日本放送作家協会賞 演芸部門、1974年上方お笑い大賞 大賞、1994年大阪市民表彰 文化功労賞、2002年日本放送協会 放送文化賞。



文化芸術センターを初めて見て「立派なホールでびっくりしました」と感想を話す笑福亭仁鶴さん。

撮影場所：豊中市立文化芸術センター 和室

小佐田定雄さん

Profile

落語作家。1952年、大阪市生まれ。77年に桂枝雀に新作落語『幽霊の辻』を書いたのを手始めに、落語の新作や改作、減んでいった噺の復活などを手がけた。近年は落語だけでなく、狂言、文楽、歌舞伎の台本にも挑戦している。著書に『5分で落語のよみかき』三部作（PHP研究所）、『落語大阪弁講座』（平凡社）、『枝雀らくごの舞台裏』、『米朝らくごの舞台裏』（ちくま新書）などがある。

小佐田 私も聴きましたが面白かったです。私が初めて仁鶴師匠の噺を聞いた時も、ものすごく早いと思うんです。声もよっぽどはるし。六代目笑福亭松鶴師匠に入門したのはどんないきさつですか。
仁鶴 自分でも落語をやってみたくなって、素人参加番組に出るようになったんです。その番組で松鶴師匠が審査員をされたので顔見知りになって。何より初代春団治に雰囲気が出ていて、入門をお願ひに行ったらいいです。

仁鶴さんって、どんな人やろと思って聴きに行ったら、師匠のあとに松鶴師匠や米朝師匠が出て、それがまた面白かった。私のように仁鶴師匠がきっかけで落語が好きになった若者は多かったですよ。ところで初代春団治の次の世代として松鶴師匠、米朝師匠、桂文枝師匠、三代目春団治師匠にながっていきいわけですけど、この4人を「四天王」と言ったのは仁鶴師匠が最初と聞いたんですけど、どうなんですか。
仁鶴 放送作家の香川登志緒（後に登枝緒と改名）さんから「4人の先輩師匠についてどうお思いですか」という質問があった。神様のような人だから何も言えない。四天王

言われました。落語家が上方全体で20人前後しかおらず、今みたいにあちこちで落語会があるわけでもなかったから。こちらが「好きやから」というだけで、頑張ってあかんかったら他を考えたらいえ、ぐらいい思っていましたね。

初代桂春団治と上方落語

小佐田 松鶴師匠とは違って吉本興業（株）に所属することになったのはどういふわけですか。
仁鶴 三代目林家染丸師匠が、私の落語を見て「吉本向きや」と紹介してくれはったんです。当時は吉本興業に所属する落語家が少なく、増やしたかったという事情もあったんですな。

小佐田 その時から初代春団治のようにやってはったんですか。
仁鶴 勝手に真似てましたからね。インタビューされたら、いつも「初代春団治の



王であり大切な人ですと答えたんです。それが「四天王」の始まりやと言ったことなんです。後から考えたら、他にも師匠方がおられて先輩方全部のおかげなんです。
小佐田 なるほど。しかし弟子をたくさん育てたという点では、この4人の師匠方の功績は大きいですね。

芸はお客さんによって変わる

小佐田 松鶴師匠から怒られた思い出はありませんか。
仁鶴 落語のやり方については、何も言われませんでした。テレビに出るようになって、落語をおろそかにしたらあかんと言われたくらいです。

小佐田 松鶴師匠は、吉本の劇場に見に来はったことあるんですか。
仁鶴 私が中腰で落語をやっているという噂が立って、なんば花月に見に来はったことがあります。それには理由があった。千人が入るなんば花月は縦長で後ろのお客さんの顔が見えへんくらい遠い。そこから後ろのお客さんにも笑ってもらおうと思っ、無意識に中腰になってたんです。しょうね、師匠は後で楽屋に来て、「この劇場やったら、あれでええんや」と言ってくれはりました。

小佐田 落語のネタをやってはったんですか。
仁鶴 最初はね、落語会で受けてた「くっしやみ講釈」をやったんです。そして誰一人笑わなかった。これでは吉本を



レコードを聴いて落語を知りましたと言っていました。だいが経ってからふと気がついたんです。松鶴の弟子やのにこんなこと言っていてええんやろかって。そんで、ある時師匠にお詫びを言ったら「わしも若い時は真似してたんや」とうまいこと言ってくれはりました。

小佐田 確かに、初代春団治は誰もが崇拜してましたな。
仁鶴 崇拜してましたし、影響を受けてない人はいないですよ。

小佐田 ないですね。桂米朝師匠でさえ影響を受けてはった。あの方がいてなかったら、今の上方落語はなかったかもしれませんな。
仁鶴 そうです。あの人がレコードをぎょうさん残してなかったら、どうなってたやろと思いますね。

小佐田 実は私は仁鶴師匠のラジオを聴いて落語会に初めて行っただけです。師匠にとっての春団治が私にとっての仁鶴師匠な

クビになるなあと思いましたが、でも、お客さんが何を期待しているか考えて、自分で小咄を作ったら受けた。お客さんの呼吸がわかってきたら、落語のネタも笑ってもらえるようになりました。

小佐田 師匠は漫才や新喜劇と闘いながら高座を務めておられたんですね。
仁鶴 昔は15分の持ち時間で笑ってもらうために必死でした。今はその必要がないのならええ時代です。落語は笑いだけでなくストーリーをきっちり描写してネタの魂がお客さんに伝わっていかんことにはあきません。古典芸能といっても時代の空気に合わせていかな受け入れられません。初代春団治はラジオやレコードと他の人がやらんことをやった。今の時代に求められていることを考えて自分なりに工夫する。お客さんが求めているものを考えたら、自然にそうやっていくもんです。噺家の芸はお客さんにつくられて、その人間が持っているものが伝わっていくんです。



©山岸伸

日本最古の芸能

能に親しむ

大阪府内に9か所ある能舞台のうち、市内には府内最古の住吉神社能舞台と、豊中不動尊紫苑閣能舞台があります。このうち紫苑閣能舞台では、市民の実行委員会に能楽師や能面師も加わって、国内トップレベルの能面コンテスト「島熊山能面祭」が開催されたり、体験会が企画されたりしています。600年の歴史を誇り、ユネスコ世界無形文化遺産にも登録されている「能楽」。市内での取り組みをご紹介します。

能面に宿す心を表現する 「島熊山能面祭」



島熊山能面祭では、梅若玄祥さん、大槻文藏さんという2人の重要無形文化財保持者（人間国宝を含む）、7人の能楽師による数次にわたる審査が行われます。「能舞台で使えるかどうか」を基準に、能楽師自らが表現力や品位などを総合的に評価

する全国でも珍しい能面コンテストです。10回目を迎えた昨年は、全国から187面の応募があり、うち28面が入選となりました。

当初から実行委員会の運営に関わる能面師の鳥畑英之さんは、「能に携わる専門家と市民が一緒になって創り上げる能面コンテストは他にはありません。この豊中から能の魅力を伝えていきたい」と話します。

8月21日に行われた表彰式では、入選作品を能楽師が個別に講評。梅若家・大槻家に代々伝わる能面の公開もありました。さらに、9回目を数える島熊山能面「梅若玄祥特別公演・通小町」も同日開催され、入選した能面をつけて梅若玄祥さんが「通小町」を舞うという貴重な機会も設けられました。



第10回島熊山能面祭 大賞 大槻文藏賞「慈童」

表紙の能面は、
(右)大賞 梅若玄祥賞「小面」
(左)特別賞 豊中市長賞「霊の男」



とりはでひでき
鳥畑英之さん（能面師 千成町）

現代能面師の第一人者堀 安右衛門師に師事。平成17年「第20回国民文化祭ふくい2005能面の祭典 新作能面公募展」において福井県知事賞受賞。



「島熊山能面祭」によせて
梅若玄祥さん（観世流能楽師シテ方）

能面は美術品ではなく、能で使われてこそ面に命が宿るのです。芸能とはもともと、人間の力を超えるものに対する畏れや敬いといった神への祈りから始まっています。私たち能楽師は、一つひとつの能面に魂が宿っていると考えていて、能面をつける時にはその魂に向かって「礼するのが習わしです。そして、舞台上で舞うことで、能面に命が吹き込まれていきます。能面を打つ時には何の曲に使うか、何を表現するかを考えていただきたい。そのためには実際の舞台をより多く観てもらいたいと思います。島熊山能面祭は、長年続いていることに価値があります。20年、30年と続いていくことで後世に残る優れた能面が生まれるのです。」

お能って なあ〜に？



応募された能面を審査する大槻文藏さん（観世流能楽師シテ方）
表彰式では「内面からにじみ出る美しさや感情の深みを表現してもらいたい」と講評されました。



が好きで、何度か観ています。最初の朗読で自然にストーリーが頭に入ってきます。こんなに身近な場所でも本格的な能楽が演じられているのとはとてもうれしい」と感想を話してくれました。



やまもとひろかず
山本博通さん

観世流能楽師シテ方 日本能楽会会員、重要無形文化財（総合指定）保持、関西学生能楽連盟顧問、大阪能楽協会特別教育委員、正花会・名古屋観舞会主宰。



「梅若玄祥特別公演・通小町」
主役（シテ）の深草の少将の霊を
梅若玄祥さんが舞いました。



豊中の能舞台

住吉神社能舞台（服部南町2-3-31）

国登録有形文化財（建造物）。明治31年（1898年）に大阪博物館の観能施設として造られた能舞台。総松造で、天満宮を経て住吉神社に移設されました。



豊中不動尊 紫苑閣能舞台（緑丘2-14-18）

豊中不動尊境内には、万葉集にも詠まれた島熊山の歌碑があります。能舞台は、能楽の他、狂言の稽古場や発表会などにも活用されています。

